

都留文科大学電子紀要の著作権について

都留文科大学電子紀要のすべては著作権法及び国際条約によって保護されています。

著作権者

- 「都留文科大学研究紀要」は都留文科大学が発行した論文集です。
- 論文の著作権は各論文の著者が保有します。
- 紀要本文に関して附属図書館は何ら著作権をもっておりません。

論文の引用について

- 論文を引用するときは、著作権法に基づく引用の目的・形式で行ってください。

著作権、その他詳細のお問い合わせは

都留文科大学附属図書館
住所: 402山梨県都留市田原三丁目8番1号
電話: 0554-43-4341(代)
FAX: 0554-43-9844
E-Mail: library@tsuru.ac.jp

までお願いします。

[電子紀要トップへ](#)

評伝 恒藤 恭

A Critical Biography of TSUNETO KYO (Part 5)

関 口 安 義

第六章 結婚、そして研究生活へ

一 恒藤雅との縁談

井川恭が恒藤規隆の長女雅と結婚するのは、京都帝国大学を卒業した年の一九一六（大正五）年十一月のことである。が、その縁談は早く京大に入学した年に起こっていた。芥川書簡に井川恭の結婚にかかわる記事を瞥見することができる。一九一三（大正二）年八月八日付井川宛芥川書簡の一節に、「君の一生をさだめるやうなかうした問題に少しでも力をそへる事の出来ないのは何となし残念な気もする」とあり、続く八月十六日付の芥川書簡には「結婚問題は片づいたかね」とある。さらに同月二十九日付の便りでは「其後君の方はどうきまつたかね」と出てくる。

のちに岳父となる相手の女性の父恒藤規隆は、明治の立志伝中の人物ともいえる人であった。波瀾に富んだその人生は、なかなか興

味深い。規隆は一八五七（安政四）年一月十七日の生まれ。豊前（現、大分県）中津の藩士恒藤半四郎の次男としての出生で、後年土壌学者として日本最初の農学博士となり、燐礦の研究と開発で日本の農業に大きな貢献をした人である。

中津を含む旧豊前国は、伝統的に教育に目覚めたところがあり、日田の広瀬淡窓の咸宜園は広く知られているが、現在は福岡県に入る豊前市には、咸宜園に学び私塾蔵春園を創設して多くの門弟を育てた恒遠俊輔の学統があった。一字違いの同姓の恒遠家とのかかわりは、定かではないもののルーツをたどれば、どこかで交差するであろう。

恒藤規隆の生涯に関する文献には、規隆自身の手になる『予と燐礦の探検』（恒藤事務所、一九三六・一）があり、孫に当たる恒藤敏彦に「明治のペドロジスト 恒藤規隆」、『ペドロジスト』第三五巻第一号、一九九二）がある。後者はその生涯を要領よくまとめ、規隆の著書と論文も記載しているので、大変参考になる。なお、国立国会図書館には『予と燐礦の探検』をはじめ、規隆の主要著書・論文

はそろっている。これらの資料によって知り得るその生涯は波瀾に富み、明治という発展期をたくましく生きた人物像が浮かび上がるのである。

下級武士の十三人の子だくさんの家に生まれた規隆は、幼少時、「中津藩の漢学者山川先生の塾に通つて専ら漢籍を学」び、「其後中津町在の島田の小学校の教師に選抜されて、十七歳の頃まで教師をして居た」(『予と燐礦の探検』)という。やがて立志の心が押さえ難く、大志を抱いた彼は大阪へ赴く。そして医師宮沢精義の長屋で玄関番をしながら英語の私塾に通い、貧困の中で苦学が始まる。一八七五(明治八)年大阪英語学校が創設されると同校に入学、二年後の一八七七(明治一〇)年に卒業。上京して官費生の募集をしていた駒場農業学校(東大農学部の前身)の試験を受けて合格する。これは恒藤規隆を土壤学者として大成させる第一歩であった。

『予と燐礦の探検』には、「其の当時の官費生は衣食は勿論、靴迄給与して呉れたので、極貧の予も、茲に初めて蘇生の思をすることが出来た。此の時の予の喜びは非常なるものであつた」とそのうれしさを率直に記している。かくて彼には学問に打ち込む時が与えられた。彼は化学をはじめとする教科を熱心に学び、三年後の一八八〇(明治一三)年六月卒業と同時に農商務省に入り、勸農局地質課に勤務した。彼が水を得た魚のように活躍するのは、この時からのことである。

恒藤規隆が農商務省に勤務しはじめて二年後の一九八二(明治一五)年、ドイツからマックス・フェスカ(Max Feska)という学者が勸農局地質課の土性係長兼駒場農学校教師として招かれ、着任する。後年規隆は、「外人教師に独逸人マックス・フェスカ」とい

人があつた。予は率先して此の人に就き土性調査の方法を練習し、爾来引続きフェスカ博士に従い、十二年間各地の土性調査に従事」(『予と燐礦の探検』)したと回想している。この時代彼は多くの論文を発表している。先の恒藤敏彦「明治のペドロジスト 恒藤規隆」にその一覧が示されているが、多くは各地の土性調査である。それがやがて燐鉱石を求めての冒険的探求、規隆のことはを用いるなら「富源の開発涵養」へと向かわせることになる。

恒藤規隆がなぜ燐鉱石に情熱を燃やしたかについて、恒藤敏彦は右の文章で次のように書いている

Kellner(筆者注、Oskar Kellner。駒場農学校教師)とFeskaの研究で明らかにされたことは、日本人の食事、さかのぼつては日本の土壤におけるおける燐酸の不足であつた。T・N(筆者注、恒藤規隆)が後半生を捧げることになつた燐鉱の追求という使命感はこつして調査研究のなから自然に生まれたのである。すでに明治19年に、タカジアスターゼ、アドレナリンなどの研究で有名な高峰讓吉がアメリカからチャールストン燐鉱石を持ち帰り、渋沢栄一らの力ぞえて燐酸肥料を試作していたように、明治の半ば頃には農業生産の発展のために国内で燐鉱石を求め的重要性が認められてきていた。地質調査所土性掛長になつたT・Nはそれに大きな努力を注ぎ込むようになり、明治27年には宮崎県下の土性調査を行った際、日南市近くの油津港付近で我国最初の燐鉱石発見をなしたのであつた。

一八九七(明治三〇)年には、規隆に欧米視察の機会も与えられ、

ペテルブルクで開かれた万国地質学会に出席し、一年後帰国する。恒藤規隆が古在由直らと日本最初の農学博士の学位を受けたのは、一八九九(明治三二)年三月のことである。翌一九〇〇(明治三三)年には再度ヨーロッパに出かけ、ドイツに滞在してフェスカーの指導を受けて同国内の調査に当たるといふ活躍ぶりである。こうして研究に夢中になる中で、彼は最初の妻と後妻の二人を病気で失うという苦難にもあつてゐる。

恒藤規隆が官を去り、独力で燐鉱の研究に没頭する決意を固めたのは、一九〇三(明治三六)年のことである。やがて彼は「沖繩県島尻郡に属する、大東列島中の一にして無人の孤島なる沖大東島即ちラサ島」で燐鉱を発見する。探検・調査は困難を極めた。彼は『予と燐礦の探検』で、一九〇七(明治四〇)年の第一回調査の苦勞を次のように書いてゐる。

……上陸して、島内の測量、並びに燐鉱の調査に従事したのであるが、全島に亘つて密生して居る林投樹(アダンプ)の爲めに僅か五間先も見えぬ程で、加ふるに落葉は堆高く積もつて寸地も露出して居なかつたので、前以てテントを張り、掘立小屋を作り、多大なる苦勞を以て、道路を開鑿し測量をしたのである。

燐鉱の発見は一種のドラマであつた。一九一一(明治四四)年には、ラサ島燐鉱合資会社(現、ラサ工業)を設立、規隆は自ら社長となり、「最初のラサ島大探検」といわれる調査に乗り出す。幸い事業は、第一次世界大戦によつて燐鉱の輸入が途絶えるという時局

にも恵まれ、次第に軌道に乗り、一九一六(大正五)年には十一万トン余の燐鉱を産出するまでになる。社業は飛躍的に伸び、彼は莫大な利益を得る。

恒藤規隆の偉さは、自国領土内に「富源の開発」を限つたことにある。あの領土拡張時代にあつて、彼は時の政府の政策を、「略奪主義に偏し一時の名利をのみ是れ計り、国家百年の計に至りては、豪も顧慮せざるもの、如し」(『南日本乃富源』博文館、一九一〇・一、「自序」と批判し、自国内の開発を提言し、実行したのである。先見性に満ちた行爲であつた。それは次代を担う少年へのメッセージともなる。『中学世界』の一九一〇(明治四三)年十一月号(第一三卷一四号)に、彼は「与は此好戦場に諸君を誘はんとす」という一文を寄せてゐる。そこでは次のように言つた。

諸君は、惟ただふに北米にあらざれば南米に赴おもかんとするであらう、満州に志を得ずんば朝鮮に止まらんとするであらう、けれども、更により以上の活躍地、より以上の奮闘場が、直ぐ手近かな帝国の版図内に存在するのを閑却されて居るの事実を、諸君は未だ知る処がないのであらうか？

このように彼は言い、自国内の開発を主張するのであつた。そのころ恒藤規隆は盛岡高等農林学校に招かれ、講義を行つてゐる。恒藤敏彦によると一九〇九(明治四二)の講義ノートブックが残つてゐるといふ。宮沢賢治が同校に入学するのは、一九一五(大正四)年の四月のことだから、まずは直接の関係はない。が、賢治は在学中、また卒業後も研究生として、土壌学の関豊太郎教授につ

いて土性調査に従事していることからしても、日本農業の近代化のために燐肥の生産と普及に努力していた恒藤規隆のことは知っており、その著書にも目を通していたのではないかと思われる。

井川恭に恒藤規隆の長女雅との結婚談が持ち上がったのは、前述のように一高を卒業して間もない一九一三（大正二）年の夏である。それは規隆の事業がまさに隆盛を極めようとしている時であった。規隆には男の子はおらず、二人の娘、雅とふじがいた。そこで長女の雅（戸籍上はまさ。雅、あるいは雅子と表記されることが多かった）で、雅で統一したい）に婿をとらせようとしたのである。なにせ家を重んじる時代であった。跡継ぎは「相続人」として、どうしても必要であったのだ。

井川恭がどういささつて恒藤規隆の娘婿に請われたのかは、判然としない。当時規隆は東京の牛込若宮町三十六番地に住んでいた。恭も上京当初は牛込白銀町に住み、都新聞の記者見習いをしていたので、取材で恒藤邸を訪れたかも知れない。そして見込まれたのだろうか。あるいは規隆自身が島根県もしくは一高関係者から情報を得たのか。子息の恒藤武二の直話では、親戚筋に島根の浜田出身者がいて、恭の母親美代とのかかわりで世話をしてくれたいという。プライバシーの問題もあるので、現時点ではこれ以上の詮索は控えたい。ただ井川恭がなかなかの秀才で、一高第一部文科を一番で卒業したという情報は、『官報』などで容易に知ることができたから、そうした優秀な青年を娘婿にしたいという規隆の希望はよくわかる。

回想記『予と燐礦の探検』などから知られる規隆の性格は、向日的で健康な上昇志向の人物である。自身が苦勞をして学んだことも

あって、苦学生には理解があった。博文館の『中学世界』に寄稿するほどの人だから、もしかすると三年ほど前、井川恭が天籟生の名で同誌臨時増刊号に寄せた例の「二週間の勉強で一高の入学試験を通過した僕の経験」を読んでいたかもしれない。そのことは十分予想される。とにかく恒藤規隆は井川恭を見込み、人を立て娘婿に申し入れたのであった。

前述のように、井川恭はこの問題を芥川龍之介にも知らせている。もともと、恭としては自分の問題は、自分で解決するほかないとの考えがあった。彼には父精一はもはやなく、都新聞の懸賞小説一等当選で得た三五〇円の賞金をはじめ、病氣療養中に投書や観世こよりの内職で稼いだ金で、なんとか一高での学生生活を続けてきたのである。京大時代も相変わらず『中学世界』その他への投稿が続くのは、断念したはずの文学への未練というよりも、学費稼ぎの意味があったはずである。結婚はそうした彼の経済問題を解決してくれる近道でもあった。幸い自身は次男である。家に拘束されることもない。が、姓が変わるということは、男子にとって大きな問題であることには違いがなかった。

恭は決意がでかかねるまま、親友芥川龍之介に事の次第を知らせた。手紙を受けて芥川は何と返事をしてよいかわからず、先にも引用したように、「君の一生をさだめるやうなかつた問題に少しでも力をそへる事の出来ないのは何となし残念な気もする」（一九一三・八・八付）との返事を書くのであった。いまだ世の中を知らないこの時期の芥川には、無理な相談であったとも言えよう。

相手の女性、恒藤雅は一八九六（明治二九）年十一月十日の生まれ。恭とは八歳の年の開きがあった。一九一三（大正二）年夏の縁

談の生じた時点では、何と満十六歳という若さであった。また東京女子高等師範学校付属高等女学校に在学中であった。結婚はこの三年半後の十一月なので、ちょうど二十歳であった。恭は満二十七歳、近く二十八歳になろうとしていた。雅は母を早く失っていたものの、性格は素直で、おおらかな心の持ち主であった。恭は周囲の人々の意見も十分とりいれ、雅との結婚、恒藤家への婿入りを決心する。ただし結婚は大学を卒業してからというのが条件であった。一九一七（大正六）年に書かれた「窓紗」（初出「松陽新報」一九一七・八連載、のち『復活祭のころ』収録）という文章には、結婚に至るまでの雅とのかかわりを、「お互ひに二三年來、つましく交際してゐた間柄」と書いている。京都帝国大学在学中も彼が何度か上京し、芥川などと会っているのも、東京に婚約者がいたことを思うと理解できる。なにせ新幹線のない時代である。京都から上京するのは、時間的にも金銭的にもきびしく、よほどのことがない限りできない相談であつたからだ。

一 糺ただすの森

一九一六（大正五）年七月、井川恭は京都帝国大学法科大学政治学科を卒業した。『官報』第一一八八号によると、政治学科の順位三番の成績である。ちなみに首席は、後の京大教授で生涯親交を結んだ田村徳治であつた。一高から来た仲間では、小栗栖国道が法律学科を一番の成績で卒業している。卒業直後の同年八月六日から二十二日まで、隠岐島前菱浦に滞在したことが「海島記」（『松陽新報』一九一六年九月連載、日付未詳）や「四十年振りの帰郷（一）」（『島

根県人』第九号、一九六〇・八・二〇）からうかがえる。九月には、京大の大学院に進んだ。彼は当初京都での就職を考えていたがままならず、大学院へ進学したのであつた。恭宛の芥川書簡（一九一六・六・二九付）の一節に、「京都の口は確定したかね」とあるが、そのころどこかの教育機関から就職の話が舞い込んでいたのかも知れない。が、それは実現せず、佐々木惣一の勧めもあつて大学院に進学し、国際公法を専攻することになる。指導教授は千賀鶴太郎と跡部定次郎であつた。

恭は大学在学中から、将来の職業として学問の世界に身を置くことをつねづね考えていた。後年彼はそのことを次のように表現することとなる。

私は京大の法科大学 そのころは法学部とは謂わなかつたを卒業したが、同級の人々の大多数は官界または実業界に就職した。漠然と、学界につながる職に就きたいと考えて、私は大学院に入学した。諸官庁の役人になったり、銀行や会社の社員になつたりすることは、いろいろと煩しい束縛の中に身を置くことであつて、自分の性に合わないし、自分の趣味にそぐわないという感じが強かつた。比較的自分のわがままがゆるさる、割合に自由に自分の仕事が出来ような職業でなければ私には向かないことを考え、学問の研究を旨とする職業はそのような種類のものらしいとの推測に基いて、卒業後に進んで行く方向を定めたわけであつた。学問の研究ということが果して自分に出来るものかどうかについては自信が無かつたけれど、ともかくもそれは自分の好みに適した仕事であると感ぜられた。

恭には学問研究の世界が何よりも適していたのである。後年京都大学事件で京都大学教授の職を辞めねばならなかった時、菊池寛からかなりいい条件で文芸春秋社入りを勧められても、結局断り、大阪商科大学に移って学生生活を続けるのも、自己の資質を鑑みてのことであった。なお、京大事件と恒藤恭の身の振り方に関しては、後章でくわしく述べることにしている。

井川恭が恒藤雅と結婚して恒藤姓となるのは、山崎時彦作成の年譜(『若き日の恒藤恭』収録)によると、この年(一九一六)十一月のことである。学生生活の続く中での結婚であった。式は東京で行われた。月日の特定できない芥川書簡の一節に、「今朝君が結婚したら何を祝はつかと思つていろいろ考へたBEE THOVENのMASKではいけないかな」とある。一方、恭は式の翌日、新婦の雅と相談し、神田の通りで芥川に贈る記念の小さな腕時計を買う。「窓紗」には、そのことが「それは友人の芥川龍之介に記念のために贈るつもりであつた。それをポケットに収めてあゆみ出しながら、彼が鎌倉から横須賀へ通ふ汽車の中で気取つたやうすをして時間をぬすみ見る恰好をちらと想像して見た」とある。すると、「記念の小さな腕時計」は、自身の結婚記念であると同時に、芥川の横須賀の海軍機関学校就職記念祝の意味が込められていたことになる。

結婚した恭と雅は、当時はまだ京都市の郊外だった京都府愛宕郡下鴨村(現、京都市左京区)の糺の森に居を定める。芥川書簡に見る当時の恭の住所は、「京都市外下鴨村松原中ノ町八田方裏」となっている。現在の左京区森本町六番地が相当する。

糺の森は賀茂川と高野川とはさまれた地にある。森の北側に下鴨神社があり、中央に河合神社がある。河合神社の祭神は、多々須玉依比売命で、偽りを正す神として昔から人々の信仰の対象とされてきた。『源氏物語』でも須磨退去の光源氏が参詣し、「憂き世をば今ぞ別るとどまらむ名をば糺の神にまかせて」と詠んでいる。現在は京都市に編入され、広い道路も走り、周辺はにぎやかであるものの、河合神社から下鴨神社にかけての糺の森の自然は、開発を逃れ、当時の静けさを保っている。糺の森について書いた恭の「窓紗」から、さわりの部分を二・三引用しよう(テキストは『復活祭のころ』による)。

森の樹木は多くは樺の木である。千年以上の古い木があるといふけれど、私には確かなことは解らない。しかし漫然考へてみたところで、六七百年以上のよはひを経たものは幾つもあるやうである。そんなやうな古い巨きい樺の木が多少の間隔を置いては立つてゐる。

彼らに卒然として向ふとき先づ起るのは偉大と云ふ感じである。この感じは象のやうな巨きい体軀をもつた動物を見たときを抱く感じと共通のところがある。しかし大樹はあの巨象のやうに不作法な、間の抜けた運動をしないで、無数の枝條をしつかりと支へたまゝ、すつくと直立してゐるので、そこに何んとなく荘嚴な或るものが宿されて居り、その下に立つて仰ぎ見る者を威服せしめねば止まない力をもつてひしひしと胸に迫つて来る。

森の中に周り百歩ばかりの池があり、私たちはそれを「みたらしの池」と呼んでゐる。私たちの住居から四五十歩でその池の岸に来る。池はDの字の形をしてゐる。深さは一尺から三尺くらいである。底は御影石の砕粒からできた白い砂であつて、周囲はちひさい石を畳んでかこんである。水は底の砂の中からも、まはりの石垣のあひだからも絶えず湧いてゐる。清らかなことは水晶の如しといひたい。冬はあたたかくて、朝などは霧を吐き、夏はつめたくて、手をひたすにころよよい。水はかなりの大量に湧くらしく、池の形のDの字の底辺にあたつて二つの細い流れとなり、三角形の小島をめぐつて、ぎきにまた一つになり、一間足らずの小川となつてながれて行く。白い砂とこまかな黒い石の粒とが水にさざれてうごいてゐる。春は椿の花が落ちて、ひとりでに流れて行く。

いつか桜のつぼみがふくらみ、毎あさ森に来て啼く小鳥のこゑがあらゆる生物の愉快を代表して抑へきれぬよるこびにふるへる。寒い冬に飽きてしまつた私たちは、伸び伸びした心をいだいて森の中や森の外をあるいた。さくらの花、辛夷（こがし）のはな、椿のはなが森の明るみや暗がりに咲き盛る。森の外には、見るかぎり菜の花がにほひ、京の山々がまるまると霞の中につつとりした顔を覗ける。冬をあひだは涸れかれになつてゐた池や川の水が満ちあふれて、孵（な）りたてのあひるの子が汀（なづな）をしたらつて群れ寄る。

糺の森は、京大在学中から恭が愛した場所であつた。一高時代が

らの友人、長崎太郎によると、京大には「糺の会」というキリスト教関係の集まりがあり、東京から森明（森有礼の子息で、森有正の父）が、毎年春と秋に糺の森に来て集會を持ち、伝道につとめたという。会には長崎太郎のほか後に西田多太郎の女婿になる上田操（教育学者上田薫の父）なども出席していた（長崎太郎「両森先生」『平安』一九五二・一二）。恭がこの会に出席したかは不明であるものの、長崎らとこの森をしばしば訪れ、散歩していたことは、間違いない。新婚の地を糺の森に定めたのは、恭がこの地を特別に愛していたことを物語る。

新居は糺の森に臨んだ小さな二階屋であつた。東京で生まれ、育つた新婦の雅には、森のたたずまいをはじめ、遠くに見える比叡・大文字・東山の山々も珍しく写つた。恒藤姓となつた恭は、この家から大学院へ通つた。学校への届け出の氏名も大学院からは恒藤恭と変わる。ちなみに芥川龍之介は、恭の結婚後もずっと井川恭の宛名での便りを寄せており、その宛名が「恒藤恭」に変わるのは、二年半後の一九一九（大正八）年五月以降のことである。本評伝では以下恒藤恭の名に切り換えて書き進めることにする。

芥川龍之介が養父道章を伴つて京都・奈良見物に来たついでに、糺の森の恒藤恭・雅夫婦の新居を訪れるのは、一九一七（大正六）年四月の半ばのことである。この旅は、芥川の養父に対する孝養の一つとして計画されたものであつた。恭の「窓紗」に、「芥川父子の京見物」の一章がある。それによると恭が二人を案内して嵐山に遊んだのは、四月十三日のことである。三人は、まず四条大宮から嵐山電車に乗り、途中で太秦（うづまさ）の広隆寺に立ち寄り、仏像に眺め入る。次にまた電車に乗つて、嵯峨の終点で降りて渡月橋に行く。さらに

龜山に登り、回りの景色を堪能した後、嵯峨の清涼寺を訪ねている。

三 学究生活

京都帝国大学の大学院に進んだ恒藤恭は、前述のように千賀鶴太郎と跡部定次郎を指導教授とした。二人とも京大では元老格ともいえる教授であった。千賀は国際公法・ドイツ法・ローマ法にくわしく、孤松庵主人・蝉水漁史と号したやや変わり者の学者。一方の跡部は国際私法で著名な存在であった。が、二人とも若い恒藤恭の関心を引く研究者ではなかったようだ。恭に「学究生活の回顧」(『思想』一九五三・一一二)という文章がある。その中でこの二人の教授にふれた部分があるので引用しよう。

大学院での指導教授は、国際公法の講座担当の千賀鶴太郎先生と国際私法の講座担当の跡部定次郎先生とであった。千賀さんは何しろ未だ電燈の無いころのベルリンに永いあいだ在留したという老大家であったし、跡部さんはそれほどではなかったけれど、相当の年配であつて、両先生と私とのあいだには、思想や感覚の上で大きい距たりがあつた。大学院に入学してから初めて両先生のお宅を訪ねたが、なんだかまるで取り付く島も無いような感じがした。その感じはいつまでも変らなかつた。それで大学院に在籍していたあいだ、実際には両先生からほとんど何一つ学問上の指導をつけたようなことはなかつた。つまり全く自分勝手に研究の方針を立てて、自分の読みたいとおもう書物をよみ、自分の考えたいとおもう問題を考えたわけであ

つた。図書館から書物を借り出すためには、借用證票に指導教授の印を捺してもらふ必要があつたので、そのために両先生のいずれかをお訪ねする外には、直接に両先生に接触することはなかつた。

以下、右の「学究生活の回顧」に従えば、恭は大学院入学当初、これら老教授に頼らず、一人で代表的な国際法学者の教科書のたぐいに目を通していた。そうした中で、「自然法の父」とも、「国際法の父」とも呼ばれるグローチウスの著書で『戦争と平和との法』の三巻のフランス訳を読み、その抄訳などを手掛け、国際法の法源の問題に興味をもつようになる。憲法や刑法や民法などには、それぞれまとまつた法典があるけれども、国際法にはそれが無いことに彼は気づいたのである。国際法には「法をつくる条約」(law-making treaty)とよばれているものがいくつもあるが、国際法の根幹を成すものは、国際社会に発生した慣習法である。

彼は国際法の法源を考えるには、一般的な慣習法、つまり法源としての慣習の問題の研究が必要となることを知る。法の理論で慣習法を重んじる考えをとるのは、ドイツの法学者サヴィニーやプフタを中心としてかたちづけられた歴史法学派である。そこで彼はサヴィニーやプフタの著書を読み出す。これらの学者はローマ法に通暁しており、その学説は古代ローマの法学者や中世の法学者などの慣習法に関する見解を検討することによって構成されていた。恭はそこで古代ローマにおける法源の歴史や学説について知りたいと思ひ、その方面のことを調べ始めた。

当時京大には民事訴訟法が専門で、西洋法制史にも関心をもつ人

としてきんじちとせう 雉本朗造教授がいた。恭はときどき雉本を訪ねては教えを乞うことになる。指導教授のひとり跡部定次郎は、当時恭の書いた国際法の法源に関する論文を見ても、若干の文字の遣い方について注意をするだけで、内容については何らの批評もすることがない。そこで彼は「それ以後は何か研究の結果を書いたものを指導教授に見てもらふことはしなかった」と書いている。

彼は国際法への関心を抱きながら次第に法哲学に興味を見出すようになっていく。当時下鴨には、新進の社会学者高田保馬が住んでいた。恭は数年年長のこの先輩を時々訪ねては教えを乞った。また岡崎に住んでいた米田庄太郎教授の家にも時々顔を出している。が、法科の諸教授の中では、法科大学時代から尊敬し、親しみを感じていた佐々木惣一の教えを受ける機会が一番多かった。恭は仲間と、時には一人で佐々木惣一を訪ねた。「ずいぶん長居して御迷惑をかけたことがよくあった。先生はいつも熱心に議論の相手になって下さったものであって、いま思い起しても深い感謝のこころを禁じ得ない」と彼は「学究生活の回顧」で述べている。佐々木惣一は、彼の生涯の恩師であったと言えよう。

恭が大学院で学んでいたころ、新カント派の哲学が、日本の学界にも移入されはじめ、彼は強い影響を受けることになる。その経緯は次節で扱うが、結婚して安定した生活生活の続く中で、彼は新カント派の法哲学の開拓者、ゲオルグ・シンメル（Georg Simmel）やルドルフ・シュタムラー（Rudolf Stammler）やエミール・ラスク（Emil Rask）らの著作を熱心に読む。彼らの方法論に魅せられたのであった。

恒藤恭のマルクス主義研究の出発も、このころからのことである。

「学究生活の回顧」には、当時「河上先生からマルクスの『資本論』第一巻を貸して頂いて、わからぬなりにそれに取組んだほかに、いろいろマルクス主義関係の書物を読んだ」とある。後にプレハーノフの『マルクス主義の根本問題』（岩波書店、一九二一・六）のドイツ語版を翻訳する下地は、早くから培われていたのである。

大学院時代には、指導教授にほとんど指導されなかったものの、仲間との研究は、それなりに刺激があった。法科の若い教員と大学院生との合同の法律研究会には積極的に出席した。それは月一回教官室で開かれ、彼は大学院の仲間の森口繁治・田村徳治・栗生武夫らと夜遅くまで議論を続けた。三高から京大法科を出た末川博との深い交わりが始まるのも、このころからであった。これら学問上の友人との交わりは、以後終生に及ぶのである。

恭にマルクスを読むよう教えた河上肇との交流も、大学院時代にはじまる。『河上肇全集』²⁴（岩波書店、一九八三・八）の書簡集にはじめて恭の名が出るのは、一九一九（大正八）年十二月十六日の榎田民蔵宛便りの中である。後述する同志社就職直後のことだ。そこには「共産党宣言の講義、一週一回宛、前週より二十名あまりの学生の為に開講致候。夜分文学部の一教室にて致候。恒藤君が傍聴し呉れられ候。同君も此節は大に社会思想の研究に興味を有ち来り居られ候」とある。

恭の大学院時代は、それなりに恵まれていた。研究に没頭できたのも、よき妻を得たからであった。二人の間に長男信一が誕生するのは、大学院時代の一九一八（大正七）年の二月十五日である。芥川龍之介は恭から名付け親になってくれと頼まれ、この年一月十九日付の便りで、

女の名は

加茂江(下加茂を紀念するならこれにし給へ)

紫乃(子)

さざれ(昔の物語にあり復活していゝ名と思ふ)

茉莉(子)

糸井(僕の友人の細君の名珍しい名だが感じがいゝから)

これで女の名は種ぎれ男の名は

治安

楼蘭(二つとも徳川時代のジャン、ロオランの翻訳

寸興味があるから書いた)

哲(この俳人の名はずきだ)

俊(山彦。(原始的詩歌情調があるぜ)

真澄(男女共用出来さうだ)

そんなものだね

書けと云ふから書いたがなる可くはその中にない名をつけて欲しいこの中の名をつけられると何だかその子供の運命に僕が交渉を持つやうな気がして空恐ろしいから

と書き送っている。実際には信一の名が付けられ、芥川の名はどれも採用されていない。ちなみに、後年恭の次男武二の長女の名に、芥川提案の中の一つ「紫乃」が採用されることになる。一方、芥川は恒藤恭の友情を記念し、三男に恭を訓読みした「也寸志」の名を付けたことは、周知のことである。芥川は信一誕生の知らせを電報で知り、即刻「こ長男の生まれたの祝す御母子の健康を祈りなが

ら/春寒く鶴を夢みて産みにけむ」(一九一八・二・一五付)との便りを寄せている。恒藤夫妻には、続いて翌年八月三十一日、次男武二が誕生する。

四 同志社大学へ

大学院に入って三年たった一九一九(大正八)年九月、恒藤恭に同志社大学の法学部教授の話が起こり、彼は喜んでその誘いに応じた。すでに仲間の森口繁治や田村徳治や末川博は大学院を退学し、京大の講師や助教授として巣立っていた。が、指導教授にめぐまれなかつた恭や栗生武夫らにはなかなか機会は訪れなかつた。彼自身のことばによるなら「指導教授の両先生から異端者視されていたため、就職の話は来なかつたのだという。それだけに同志社の話は、彼にはうれしかったのである。「学究生活の回顧」によると、同志社就職に関しては、「河上肇先生をはじめ、小島祐馬さん、榎田民蔵さんが尽力して下さった」とある。当初の担当は社会思想史であった。大学時代から恒藤恭は社会思想の方面に興味と関心をもち、河上肇の教えも受けていたので、違和感は少しもなかつた。また、専門ともいってよい国際公法の講義も担当するようになる。

同志社大学は、新島襄によって一八七五(明治八)年に同志社英学校として創設された学校である。一九〇四(明治三七)年同志社専門学校、一九二二(明治四五)年に専門学校令による同志社大学となっていた。大学令による大学昇格は、恒藤恭が就職した翌年の一九二〇(大正九)年のことである。当時の総長は海老名弾正であった。

海老名弾正は恒藤恭が一高に学んでいた頃、本郷教会の牧師として熱弁を振り、キリスト教に関心のあつた一高生を魅了したものであつた。恭の友人藤岡蔵六もその一人であつた。藤岡は後年の回想で、「私は一高在学中可なり屢々本郷教会へ説教を聞きに行った。海老名弾正牧師は雄弁家であつた。而もそれは技巧的雄弁ではなく、牧師の熱烈な信仰と高潔な人格とから自然に迸り出る魂の雄弁であつたので、強く私の心を惹き付けた」(『父と子』私家本、一九八一・九)と書きつけている。藤岡蔵六とは特別に親しく、一高最後の学期は、日独学館の同じ部屋で起居を共にした仲であつた恭は、当然彼から海老名のことも聞いていたことであろう。否、恭も一度ぐらゐは海老名の説教を聴いていたかも知れない。

同志社と言つまでもなくミツシヨンスクールである。が、島根県立第一中学校時代にオリバー・ナイトの聖書研究会に出席して以来、キリスト教には何かとかわりがあつた彼には、同志社大学の雰囲気は好ましいものに写つた。就職翌年の一九二〇(大正九)年には、それまで名称は大学というものの、法律的には専門学校に過ぎなかつた同志社も、大学令によつて他の帝国大学と同じ扱いを受けることになつて発展途上にあつた。当時の同志社大学法学部について、恒藤恭は「学生生活の回顧」で次のように記している。

当時、法学部の部長は中川精吉氏であり、阿部賢一、中島重、今中次麿、和田武、山口正太郎、高木庄太郎、瀬谷佐次郎、等々の諸氏が同僚であつた。私が推薦して栗生武夫君も教授陣に加わつたし、住谷悦治君なども助手としてそれに加わつた。そのころの同志社大学は現在とはちがつて小規模のものであ

り、教授の数も、学生の数も少なかつたけれど、海老名弾正先生が総長であり、何かしら学園の中に新鮮な生命があふれていたことを想い起す。

恒藤恭が同志社大学教授に就任した一九一九(大正八)年は、第一次世界大戦が終了し、フランスのパリ郊外のヴェルサイユ宮殿で戦後処理のための講和条約が取り交わされた年であつた。この年六月二十八日、ヴェルサイユ宮殿で調印された連合国とドイツとの講和条約(ヴェルサイユ条約)は、国際連盟規約について定めたほか、ドイツの領土割譲、海外植民地の放棄、賠償支払い、軍備制限に關してのものであつた。翌年一月には同条約第一編の国際連盟規約に基づいて国際連盟が発足し、また、同条約第十三編の国際労働規約に基づき労働総会が開かれるというように、国際法の歴史に新しい機運が見られるようになる。すでに述べたように恒藤恭の国際法に対する興味は、大学院時代からのものであつたが、こうした時代の動向と軌を一にしてさらにふくらむ。そしてこの時期、彼は同志社大学で国際公法の授業を持つこととなるのであつた。

一方、彼は法理学(法哲学)にも関心をもつていた。大学時代仁保龜松の法理学の講義を彼は聴いたものの、穂積学説の流れを汲むその理論には、感興を覚えることがなかつたという。そのため大学院時代にも仁保龜松の教えを仰ぐことなく、独習で法哲学の古い書物と格闘する。ドイツの学界を風靡していた新理想主義の哲学は、第一次世界大戦中の日本の学界にも影響を及ぼすようになっていたのである。

西田幾多郎の著作はその代表格で、『自覚に於ける直感と反省』

(岩波書店、一九一七・一〇)は、東京の恒藤恭の仲間、芥川龍之介や松岡譲や藤岡蔵六らの間でも話題になっていた。芥川はこの本を手にし、「えらい人がえらい事をし出したもんだと思つて驚嘆しながらよんでゐる實際こつちの不真面目な所へ棒喝を食つてゐるやうな気がするねボクなんか余計さう思つた」(松岡譲宛、一九一七・一〇・三〇付)との感想を述べている。なお、同じ西田の『現代に於ける理想主義の哲学』(弘道館、一九一七・五)は、新理想主義哲学に指標を与えるものとなつた。

西田哲学や欧米の法哲学の書物に目を通していた恒藤恭は、前述のようにマルブルヒ学派のシュタムラー (Rudolf Stammler) やバーデン学派のラスク (Emil Rask) の著述を知ることになり、熱心にそれらを精読する。いずれもドイツのすぐれた哲学者であり、新カント派から出発しているところに共通項がある。とりわけラスクには凝つたと言ひ、その「鋭い透徹した所論に敬服した」と彼は「学生生活の回顧」で語つてゐる。

恒藤恭がラスクの訳書『法律哲学』を大村書店から刊行するのは、一九二一(大正一〇)年二月のことである。処女出版であつた。大村書店の社主大村郡次郎は、哲学者出陣の友人であり、恒藤恭の訳書の出版を快く引き受け、大村論文叢書の一冊に加えてくれたのであつた。この出版が契機となつて、彼は次々に訳書や著書を刊行することとなる。書くことはもとより好きであつた。若き日の文章修業は大いに役立った。この年の六月には、ブレハノフの『マルクス主義の根本問題』の翻訳書を岩波書店から、十月には『批判的法律哲学の研究』を内外出版株式会社から出版する。また、少し前に恭は長谷川如是閑と大山郁夫が中心になつて刊行されていた『我等』

の一九二〇(大正九)年十月号にヨセフ・カルナーの『法律制度的社会的機能』のはじめの部分を読出掲載していた。「この本は」あまり有名ではないが、推奨すべき良書であると思ふ」と恭は言ひ、「経済学と法律学との境界区域の開拓」を評価する。翻訳は恒藤恭の学問的出発を考える上で、大事な位置にある。「我等」には翌一九二一(大正一〇)年八、九月号にも、アンリ・ミッシェルの『サン・シモンの国家観』を訳出掲載している。

ところで、『批判的法律哲学の研究』は、恭の訳書を除いての最初の著書であつた。内容はラスクの『法律学方法論』の解説、「シュタムラーの法理学の根本的見地」、「シュタムラーの『法律概念論』の考察」、「シュタムラーの『法律理念論』の考察」、「フリースの法律哲学の考察」の五つの論考から成る論文集である。それまでに『法学論叢』や『同志社論叢』に発表したものを一つにまとめたものであつて、ここに彼の研鑽の跡がはつきりと読み取れる書物といつてよい。

後年の『法の基本問題』(岩波書店、一九三六・一〇)や学位論文『法的な人格者の理論』(弘文堂書房、一九三六・一二)を支える考えが、ここに早くも顔を出している。その思索は沓え渡り、真理への深い凝視がある。しかも文章はうるおいと気品と流暢さに富み、よどむところがない。「批判的法律哲学研究」一巻は、若き恒藤恭の学問的出発を告げるとともに、後年の豊かな実りを期待させる書物となつた。

刊行先の内外出版は、後述する土田杏村との関係の深い出版社である。杏村の個人誌『文化』の発行所であり、すでに杏村は『文化主義原論』や『自由教育論』などの著書を、ここから出してゐた。

そんなこともあつてか、恭の本が出るや、杏村は『文化』第三巻第六号（一九二二・六）で取り上げ、次のように好意的に批評する。一部を引用する。

経済学の基礎を哲学的に研究することは、我国では左右田博士の著以来、余程の進歩を見せてくれた。併し其れにしても法学者連中は一体何をして居るのであらうとは、私許りの感慨では無かつた。さういふ時に當つて此の著は老人学者に対し我々青年研究者の万丈の氣焔を吐いてくれたものだ。従来とても法理学などいふ名目の学問は我国にあつた。其れに關しての著書もあつた。併し其の何れもが方法的では無かつた。依然たる常識の積集であつた。併し我々青年研究者も最早其れでは満足しなくなつて了つた。恒藤君は此の方面の熱心な、又正しい意味に於て的方法的研究者である。此の著は三大部に分たれ、ラスク、シュタムラア、フイリスの法律哲学が解説せられて居る。解説といふ点では此れほど原著に忠実な安心してよめる書は無い。随分と骨の折れたものであることが一見して分かる。ラスクは法律学方法論だけになつて居るが、ラスクの全般に就ては、既に同君の全訳があるから、此れで何等欠くる処は無い。シュタムラアは未だ全部の解説が済まない様だから、我々は後著の出づる日を待つて居る。全篇此れで何等の不満もない。

実にいい批評だ。「方法的の研究者」として恒藤君を認め、その処女論文集の刊行を高く評価しているのである。恭は専門の学者以上によく読み、核心を衝いた杏村の批評に、感心すると同時に自分

を理解してくれる友を見出してうれしかった。以後恒藤君と土田杏村との親しい交流が生まれることとなる。杏村と恭のかかわり、二人が協力した自由大学運動のことは、次節で詳説する。

研究生活に脂が乗り始めた一九二〇（大正九）年六月、恒藤君の長男信一が病没する。二歳と四か月の可愛さ最中の死であつた。病因は伝染病の疫病である。発熱・嘔吐・ひきつけが続き、あつという間の死であつた。恭はその悲しみを、ニューヨーク滞在の長崎太郎と東京の芥川龍之介とに書き送つて居る。恭の長崎宛便りは、現在ご遺族の長崎陽吉宅に保存されている。それには「子供をもつてみて、愛児を失つた人々の悲しみが分かるやうな気がしてゐたが、それは誤りだつた事が分かつた。子供を亡くして、初めて愛児を亡くした人の悲しみがどんなに堪へ難いものであるかといふ事を知つた」とか、「絵を描く事が好きで、電車や汽車などをひとりて描き、五つ六つの子供位には描くやうになつてゐた。この夏は、なるべく彼の遊び友達になつて遊んでやらうと思つてゐたのに……」（一九二〇・八・一四付）などである。

一方、芥川家には、この年四月十日（戸籍上は三月三十日）、長男比呂志が誕生していた。それだけに友人の悲しみがよくわかつた。芥川はすぐに梅やみの便りを出す。これは全集に収録（一九二〇・七・三付）されている。全文を引用しておく。

啓

君の手紙を見て驚いた 実際驚いた

郵便局の莫迦が始ははがきの（二）を置いて行き（一）は君の手紙と殆同時に来たのだ だから余計驚いた

さぞ君も奥さんも御力落しだらうと思ふ 比呂志を見てこいつに死なれたらと思ふと君たちの心もちも可成わかるやうな気がする 僕の子もいやにませてゐるから何だか不安にもなり出した おやぢが君の手紙を読んで泣いた おふくろや何かも泣いた 文子は泣きながらぼかんと座つて「まあどうしたんでせうまあどうしたんでせう」と愚痴のやうな事を云つてゐた 女や老人は涙もろいものだと思つた それが羨しいやうな気も少しした 二番目の御子さんはどうした？ 病氣の名が書いてなかつたが何病かななどと思つてゐる

悼亡一句

五月雨や鬼蓮の蒼咲きもあへず

七月二日

恒藤 恭 様

二仲

御悼みの歌一首

ひんがしの国にかなしき沙羅木の花さきあへぬ朝なるかも

芥川龍之介

恒藤雅子様 粧次

長男信一の死は、若き日の恒藤恭の一番の悲しみであった。そうした彼を慰めたのは、次男の武二の存在であった。信一とは年子の武二は、幸い丈夫に育つていたのである。彼は武二を「武ちゃん」と呼んで慈しみ、自らは学問に励むことで、愛児信一の死を乗り越えるのであった。ちなみに武二は後年父の学問を引継ぎ、法律学を専攻、同志社大学教授となった。専門としたのは、法思想史である。

第七章 信濃自由大学

一 土田杏村

恒藤恭が同志社大学に勤務していた一九二二（大正一〇）年秋、十一月一日、土田杏村の自由大学が長野県上田市で開校した。恭は講師として参加し、七日間にわたって法哲学の講義をすることになる。会場は上田市横町神職合議所であった。

土田杏村は、本名茂（こも）一八九一（明治二四）年一月十五日、新潟県の佐渡の農家の生まれ。兄は日本画家の土田麦遷である。新潟師範学校を経て東京高等師範学校に学び、丘浅次郎や田中主堂から大きな影響を受ける。卒業後京都帝国大学文科大学に入学、哲学を専攻した。京大では西田幾多郎から思索の厳密を学ぶべきことを教わる。大学院に進学し、六年間在籍。この間個人誌『文化』を刊行して論陣を張った。彼は生涯、大学など公職に就かず在野の哲学者として振る舞った。出陣は『出陣自伝』（『出陣著作集』7、勁草書房、一九六三・一一）で杏村を評して、「会つて話すまで、まさか京都の哲学科出身とは思わず、田中主堂の弟子かなんかのように考えていた。会つてみても、京都の哲学者らしい人ではなくて、東京の町中の野人ともいうような感じだった」と言う。出陣はまた、「京都から離れて東京に来た新進の哲学者たち」、あるいは「京大からというだけでなく、いわば哲学の主流からわき道へそれた」哲学者たちを「離れ者」と呼び、杏村をその第一号、以下谷川徹三、林達夫を第二、第三号、三木清、戸坂潤を第四、第五号としている。

杏村が京大に入ったのは一九一五（大正四）年のことなので、恒藤恭の二年後輩に相当する。が、二人は大学時代には交流がなかった。その親しい交わりが始まるのは、恭の同志社時代の一九二〇（大正九）年のころからよつである。もともとこの二人は文学や哲学に関心をもち、思想や社会問題を総合的に把握しようとする態度において、同質のものをもっていた。こうしたことを含めての恒藤恭と土田杏村とのかかわりを考察した論に、上木敏郎の労作「土田杏村と恒藤恭」（『信州白樺』第二九号、一九七八・五）がある。上木はこのころの杏村と恭との共通項を、「新カント派の哲学から大きな影響をうける一方、マルクス主義から学びとらうとしていた姿勢」に見ている。

恭の回想によれば、「ある機会から土田杏村君と知り合いになり、いくたびか新町頭の同君の宅をおとすれた。今ではそのあたりは全く市街地の一部分となつてはいるけれど、当時そのあたりは紫野の名前から連想されるような、静かにのんびりした風趣が昔ながらに残つて居り、野中の一軒家に杏村君をたずね、意気軒昂たる同君の論談をきくのはゆかいであつた」（『学生生活の回顧』）とあるが、前述のように、その交流は恭が大学院を中退し、同志社大学の教授に就職した翌年一九二〇（大正九）年の頃からである。

右の文章の冒頭の「ある機会」とは、これまた恭の回想、「土田杏村の社会哲学への方向」（『セルバン』一九三四・六）によれば、「たしか、大正九年の頃、或る機会に土田君から書簡を貰ひ、こちらからも返事を出したのが、同君と私との交際の始まり」とある。恐らくは筆まめな杏村が恭の何かの論文を読み、質問の便りをしたのである。恭の方でも杏村を深く理解し、認めるところがあつた。

右の『セルバン』の一文には、「おなじく京大の哲学科を出た同窓の誰れ彼が次第に大学だの専門学校だのと云つたやうな場所に生活のよりどころを見出して、そこに腰を落ち付けて行つた中に、どの学校かの教師になるでもなく、（僅かのあひだ中外日報社に入社してあた外は）どの新聞社かに籍を置くでもなく、自由不羈の社会的地位をまもりながら、自己と家族との生活を維持しつゝ思索的努力をつゞけて行つた土田君を、私はいつも尊敬のこゝろをもつて見まもつたものであつた」との一節がある。杏村も先に掲げた『批判的法律哲学の研究』の書評に見られるように、恒藤恭の仕事を深く理解していた。こうした関係もあつて、杏村は自由大学を構想する中で、早くから第一の講師として恒藤恭を頭においていたものと思われる。

自由大学とは第一次世界大戦後の、いわゆる大正デモクラシー運動の中から生じた地域住民の自己教育運動、今日のことばを用いるならば、生涯学習といふことになる。信州はもともと教育の盛んな県であり、各地教育会の主催する上からの季節大学などが同じころから始まつていた。隣県山梨県では一九一三（大正二）年八月に、北巨摩郡教育会の主催する夏期大学が、自由大学に刺激されて秋田村（現、長坂町）の清光寺で開かれ、芥川龍之介が講師として招かれていたことも想起される。自由大学運動は、目覚めた青年が自腹を切つて推進しようとしたところに特色があつたといえようか。いうならば、下からの草の根運動としての文化運動としてとらえられる。もっとも各地の季節大学、夏期大学とて必ずしも上からと割り切ることはできず、信州での各地の季節大学は、山本鼎の自由画教育運動・農民美術運動、信濃黎明会の普選運動など、大正デ

モクラシーの機運のもとでの人々の学ぶ意欲と連動していたのである。

二 自由大学運動

さて、自由大学運動は、一九二〇年代に長野県と新潟県を中心に全国各地で展開することになる。その出発となったのが、上田自由大学であった。山野晴雄はその誕生を「自由大学運動の歴史とその意義」(『自由大学運動と現代』自由大学研究会編、一九八三・一〇)で、「上田自由大学の生成はどういうかたちであったのかという点からみていきますと、上田・小県地域で創造的に生きようとしていた三人の青年たち、すなわち金井正と山越脩蔵、そして猪坂直一という三人の青年たちと、新しい文化運動の実現に意欲を示していた在野の哲学者である土田杏村との人間的な交流のなからつくりだされてきたものである、と言つことができると思います」と言つ。また、猪坂直一は「土田杏村先生と自由大学」(『信州白樺』第二九号、一九七八・五)で、土田杏村や恒藤恭とのかかわりも含めて信濃自由大学の発祥を次のように書いている。

(土田) 先生は新潟師範、東京高師、次いで京大文学部と学んで、教育事業に特に熱心であつたことは明らかであるが、哲学者としての先生は、世の学者、教授と称される人々が、書齋或いは講壇にあつて専ら思索にふけり、社会的活動に消極的であることに強い不満をもち、われこそは一哲学者とし評論家として、社会的活動に勇躍しようという強い意欲をもつておられ

たのである。

信濃自由大学という名称は、われら数人の案出にかかるのだが、先生はこれに賛成せられた。そして、主として農閑期に夜間を十分利用し、謂はば労働しつつ受講するという方式、つまり当時青年会や哲学研究会等がしばしば行つていた方式を自由大学がとることも非常にいいことだと推奨せられた。もっとも先生は、かねてイギリスのボオルの提唱するプロレットカルト即ち労働者の学習を生涯教育の典型として推奨しておられたので、われらの計画に最も賛成せられた。このようにして信濃自由大学の外型はできあがつたが、何よりも重要な肉付け、即ち講座及び講師の選択委嘱は、当分のうち土田先生にお願ひすることとなつた。また大学の運営は数人の役員をあげて行うこととし、先づ顧問に土田先生をお願ひし、専任理事に猪坂直一、理事に金井正、山越脩蔵を選び、事務所を上田市既裏の猪坂直一宅に置いた。

このようにしてその年(大正十年)十一月、信濃自由大学は、上田市横町の神職合議所の広間を教室に借り、京大助教恒藤恭先生(筆者注、これは猪狩の記憶違いで、当時恒藤恭は同志社大文学教授であつた。京大への転出は翌年二月のことである)の法律哲学の講座を以てスタートした。

右の文章によれば、杏村を講師とした農閑期の哲学講習会が、発展して自由大学となつたことが分かる。しかも、それはその地に住む青年によって立案されたものであつた。杏村の起草した「信濃自由大学趣意書」の「設立の趣意」には、次のようにある。

学問の中央集権的傾向を打破し、地方一般の民衆が其の産業に従事しつつ、自由に大学教育を受くる機会を得んが為めに、総合長期の講座を開き、主として化学的研究を為し、何人にも公開する事を目的と致しますが、従来の夏期講習等に於ける如く断片短期的の研究となる事無く統一連続的研究に努め、且つ開講時以外に於ける会員の自学学習の指導にも関与する事も努めます。

この一文にもはつきりと謳われてように、自由大学は仕事をしながら学ぶ大学教育である。しかもそれは、折しも各地で行われるようになった夏期大学などのように、年に一度といったことではなく、「総合長期の講座」に活路を見出すものであった。さらに趣意書は講座の種類として、哲学・倫理学・美学・社会学・心理学・宗教学・教育学・文学概論・法学・経済学などの講座科目を列挙した上で、統一的に化学的研究をするのだとしている。こんにち言うところの総合学習トータル・ラーニング、学際研究インターディシプリナリが意図されていたことに注目したい。聴講生は資格を問わず、男女の区別もなく、申し込みをもって聴講生にするというのも、当時あっては新しいやり方である。欧米では成人教育がこのころには確立していたが、日本においては信濃自由大学がそのはしりとなったのである。

自由大学の「自由」とは、むしろ大正期の教育改革の原理として、好んで用いられたことばなのである。長野県の上田・小県地方では、同じころ山本鼎の自由画教育運動が展開していた。また、中央では少し前から鈴木三重吉の『赤い鳥』(創刊、一九一八・七)の文学運

動がはじまり、自由作文(つづり方)のほか、北原白秋の児童自由詩が推進されており、児童自由画には山本鼎が参画していた。やがて児童自由詩の北原白秋、児童自由画の山本鼎、文芸教育の片上伸、それに教育実践家の岸辺福雄が加わって、『芸術自由教育』(創刊、一九二一・一)という雑誌も刊行されることになる。千葉県では千葉師範の付属小学校を中心に自由教育を打ち出した教育改造運動が進行中で、のち『自由教育』(創刊、一九二四・三)のち改題されて『自由教育研究』となる)という雑誌が出る。

大正期の教育改革運動に大きな役割を果たした成城学園は、自由教育を看板とし、この学校の主事をして、昭和になって玉川学園を創立する小原国芳には、『自由教育論』という著書もある。羽仁もと子が自由学園を創設するのは、一九二二(大正一〇)年のことである。自由を校名には謳わなかったものの、同年、西村伊作が与謝野寛・晶子夫妻の協力によって、東京駿河台で始めた文化学院も自由を意識して設立された学校であった。

自由大学の構想は、こうした世の動向と密接にかかわっていたのである。しかし、実際に踏み出すのは、難しかった。一九二二(大正一〇)年六月三十日、土田杏村は先の「信濃自由大学趣意書」の草案を信州上田在住の山越脩蔵に送り、自由大学に招く講師の人選の困難さを語っている。「講師の方が中々厄介です。大学の講師連中は雑誌に何かかいてさへ、上の方から叱られて居る始末故、講師の囑託をしても中々承知してくれないだらうと思ふのです」「恒藤と高倉と僕とだけは大丈夫だと思ひます。あとは同志社大学の教授によい人を物色しようと思ひます」(引用は山越脩蔵「土田杏村の手紙と上田自由大学」『信州白樺』第二十九号、一九七八・五による)とあ

る。これによれば、上からの締め付けが厳しく、自由を看板にした自由大学の講師の招聘に苦勞していることがわかる。また、この書簡では、杏村が上田での信濃自由大学を開校させるに際し、当初から恒藤恭を信頼していたこともわかる。事実、この年十一月一日の信濃自由大学の第一期第一回の講義は、当初杏村が行うことになっていたところ、病気で出られなくなると、恒藤に依頼し、「開講の挨拶」まで代わりにさせている。

三 恒藤恭の講義

信濃自由大学第一学期の講義は、恒藤恭の法律哲学で始まった。現在資料として残された記録に従うと、日数は七日間、会場は前述のように上田市横町神職合議所である。出席者は五十六名であった。ちなみに第一学期の他の講座と講師名とを列挙すると、文学論のタカクラ・テル、哲学史の出陣^{いでたかし}、哲学概論の土田杏村、倫理学の世羅寿男、心理学の大脇義一である。当時恒藤恭の法律哲学の講義を聴いた猪坂直一は後年、次のように言つた。

……最初の講座であるからわれらは非常に緊張し、この若きプロフェッサーの講義を一語も聞き洩らすまいとした。その第一夜の感激を私は今も忘れることができない。講義の途中で恒藤氏は急に内容を哲学概論にきり変え、いわゆる新カント派哲学の講義に入った。学生の顔ぶれや質問ぶりをみて、まず基礎を与えねばならないと思われたらしい。私はその頃哲学の勉強もやっていたが、恒藤氏の講義を聴くに及んで、今まで随分無

駄な努力をしていたということが反省され、学問はこれではいけないと痛感した。そしてこれからの講座がもたらすものを想像して更けゆく夜路を心はずませて帰ったものだ。(『回想・枯れた二枝―信濃黎明会と上田自由大学』上田市民文化懇話会一九六七)

また、同じくこの講義を聴いた山越脩蔵は、後年次のように書いている。

恒藤先生の法律哲学は意外に聴講生が多く私も始めてのことであり第一講座の成功は猪坂君をも喜ばせた。先生の講義の内容も初心者に懇切に法の基礎的問題を説明され日常法律などに興味のないものをも法の世界をもう一度さぐりたい欲望を涌せた。真面目な先生の人は聴講者を心服させた。先生は開講にさきだつて信濃自由大学の開講の挨拶を土田先生に依頼されて細々とされ私も事務局も恐縮した。

(『草稿・信濃自由大学』『自由大学研究』第二号、引用は『自由大学運動と現代』による)

講義は夜に行われた。昼間働いている人々が、夜勉強をしに集まる。信濃自由大学は夜間大学の発祥でもあった。恒藤恭は熱心に情熱をこめて法律の基本的諸問題を語ったのである。山越脩蔵は「土田杏村の手紙と上田自由大学」(『信州白樺』第二九号、一九七八・五)で当時の恒藤恭を、「若いにかかわらず、腹のすわつた学者」と評している。昼間は講義がないので恭は、スケッチブックを携えて上

田周辺の高原地帯を散策し、目に止った景観をスケッチした。なお、右の山越の文章には、上田自由大学の中心メンバーだった金井正・猪坂直一・山越脩蔵の三名宛の恒藤恭の書簡が収録されている。自由大学の報酬のことにもふれていて参考になるので、引用しよう。

……おかげ様でまことに愉快的な一週間を送りました。あつく御礼申上げます。……その際は過分に報酬を頂きましてまことに御気の毒に存じ上げます。また出発の折りは早朝わざわざ御送り下さいまして恐縮でした。皆さんの親切そうな微笑をたへた御顔つきをとまじき想ひ出しながら、しづかなひろびろとしたあかつきの浅間山の裾野を、はしつてゆく汽車の窓よりかかつてゐたその日のことが心にうかびます。

はじめてのことであり、準備も疎漏でまことに不つつかの講義でしたが、私自身は、皆さんの真摯なかつ熱心な御尽力の態度なり、一般聴講生諸君の篤学なそして元気にみちた様子なりに接して、大変愉快でした。あの昔の塾のやうな感じのする神道講習所のしんとしづまつた空気の中に、電灯の光が、あかるくたのしさうに輝いた。あのアトモスフィアもなつかしく思ひ出されます。

それから秋ふかい信州の山野風光をたのしむことができたのも、望外の幸ひでした。……

猪坂さんにはいろいろ前後御手数を煩して相すみませんでした。

金井さんの御宅で暖炉の和かいぬくもりにいたはられるやうなところもちで、閑寂な半日をすこしたこともゆかいでした。

村でのいろいろの御試みなりまた一般の状態なりをくはしく見聞させていただくつもりでゐたのですが、そのひまがなくて遺憾でした。農民美術のことはかねがね承つてゐましたので、御みやげにもつて帰るよといつて出ましたが、もつて帰らなかつたので、うちの者は失望してゐました。この冬製作品ができりましたら、いろいろ分譲して頂きたいと存じます。

山越さんはそのうち御めでたい事が御ありのやうに承りましたが、いつごろですか、今からあたらしい御家庭を祝福申し上げたいと思ひます。

自由大学の第二回の講義も近づきましたね、寒さはつて、一そうひきしまつた感じのする夜々たらうと存じます。

別紙はただ今心にかんだことをかきつけてみました。第二回講義開始の際に、もし御差支へなくば、聴講生諸君のまへで御朗読下さい……。

十一月二十八日よる

恒藤 恭

金井 正様

猪坂直一様

山越脩蔵様

四 信州の自然の中で

恒藤恭から金井正はじめ三名に宛てて出された便りに添えられた「別紙」といふのは、「信濃自由大学聴講者諸君！」といふ一文である。第一回講義終了二十日後に書かれたもので、第一学期第二回の

講義(タカクラ・テルの「文学論」)の前に読んでもらおうという趣向であった。これは十一月一日の夜、講義の始まる前に金井正によって朗読された。これを見ると恒藤恭がいかにも自由大学に愛着をもち、夢を描いていたかがわかる。さわりの部分を引用しよう。

今思ひ出してみると、神職合議所の建物の内部の光景が、その夜の光景が、希望と光明とにみちた会合のイメージとなつて、心にうかんで来ます。世の中には、殊に現在の社会には、外形が華麗であり、宏大であつて、しかも内容が空疎であり、貧弱である計画や、事業やが、あり余るほどあつて、われ／＼を失望させ、憤慨させる場合が少くないのは、まことに残念なことと思ひます。それからみると、信濃自由大学が、たとへてみると、むかしの塾でも思ひおこさせるやうな形態をとつて生まれて、謙遜に質実に、みづからの存在と成長とをはじめたといふことは、それにたづさはる人々の誰れにとつても、かへりみて心たのしく、心づよい事柄ではないでせうか。

勿論、また一方には、次のやうな空想を心に気がいてみることも、自由大学に関係ある人々にとつて、ゆるされたる愉快な特権でありませう。沈痛な、雄健な姿にそびえる山々を背景にもち、千曲川にそふ静かな平和な高原が窓から見わたせるやうな町はづれか何かに、信濃自由大学の建物が立つてゐる。それはこの山また山の中にうまれた信州の文化の特色を直観的にあらはすやうな建築であり、そして常にその文化の先がけとなり指導者たることを以て任ずる信濃自由大学の精神と主張とを象徴するにふさわしいところの清新な堅実な建築である。そ

こには文化哲学ならびに文化科学に関する参考書籍をかなり豊富に蔵してゐるライブラリーがあり、さほど広くはないが、清楚な、質朴な、そして冬はあた／＼かい講堂がそなはつてゐる。

上田の信濃自由大学での日々は、充実した七日間であつた。それは恒藤恭にとつて、思い出に残る日々であつた。そこには昔の塾、理想の寺子屋教育を思わせるものがあり、「かへりみて心たのしく、心づよい事柄」であると彼は言うのである。彼は「千曲川にそふ静かな平和な高原」に、やがては信濃自由大学の独自の建物が建つことを夢想する。それは「清新な堅実な建築」であり、「文化哲学ならびに文化科学に関する参考書籍をかなり豊富に蔵してゐる」図書館があり、「清楚な、質朴な、そして冬はあた／＼かい講堂」があることを夢見る。まさに理想のコミュニティ・カレッジを、彼は描いていたのである。

恒藤恭は、翌一九二二(大正一一)年十一月一日から五日間、長野県蚕業取締所上田支所で行われた第二期信濃自由大学の第二回の講座にも出向いている。第二期は土田杏村の「哲学概論」が十月十四日から五日間あり、それに続いたものだった。恒藤はこの年二月に同志社大学を辞任し、当時は京都帝国大学経済学部助教授になつてゐた。自由大学での講義は、前年に引き続き、法律哲学を行った。彼は講義のテキストにフリードリヒ・ハルムス(Friedrich Harms)の『法律哲学概論』を翻訳(大村書店、一九三二・一〇)して用いることになる。この本を急遽翻訳し、テキストに用いたことについて、「訳者序」で恒藤恭は次のように書いている。

私は、昨年の秋長野県上田市に創立された信濃自由大学で、法律哲学の講義をすることを引き受けた。昨年は自分のこさへた原稿によつて、話してみたが、その際の経験からかんがへて、今年は、約一週間の短い講義をなるべく有効に利用するために、何か適當の教科書を使つてみようと思ひ立つた。かれこれ思索した後、右のハルムスの著書は、かやうな目的にふさわしいものであると考へたので、その翻訳を企てた次第である。

この訳書は法律哲学の入門書として評価を得ることになる。杏村は『文化』一九二三年二月号で、「忠実な翻訳」と言い、「自然法学派と歴史法学派を批評するあたりの論理は整頓し過ぎる程鮮やかなもの」と高く評価した。ちなみにこの本は、第二次世界大戦後の一九四九年六月、『ハルムス法哲学概論』の題名で新版が玄林書房から刊行されている。恒藤恭は十分準備して、中身の濃い講義をすることになる。

この年も講義のない昼間は、相変わらず周辺を散策しては、趣味の水彩画に精を出した。また、「学究生活の回顧」によれば、「沓掛に行き、浅間山の山麓のさびしい温泉宿のような家に在住していた高倉輝君をたずね、うつくしい黄ばんだ落葉松の林や、すすきの花が風にゆれ動いている高原を同君と散歩した」という。故郷松江とはまた違った信州の自然の中の数日は、恒藤恭の心をなごませるものがあった。彼はスケッチブックを手に、高原の秋の美しい自然にみとれ、それを水彩画に描く。

自由大学は長野県では飯田自由大学や信南（伊那）自由大学、松本自由大学、新潟県では、魚沼自由大学、八海自由大学、さらに福

島、前橋などにも普及する。が、恒藤恭の自由大学への出講は、一九二二、二（大正一〇、一一）年の二回で終わった。土田杏村としては、翌一九二三（大正二二）年八月に新潟県北魚沼郡堀之内町に開設された魚沼自由大学（会場、堀之内小学校）の第一回講義にも、恒藤恭の出講を期待していたが、都合がつかなかったようだ。一九二四（大正一三）年の四月から一九二六（大正一五）年九月までは、在外研究として日本を離れているので、自由大学の講師としては上田自由大学の第二回が最後となった。自由大学そのものも、杏村の病氣や信州の養蚕業の不況や講師難などの悪条件が重なり、聴講者の減少を来し、一九二六（大正一五）年三月にひとまず中断し、一九二八（昭和三）年三月に再建されたが、かつての活気は取り戻せず、一九三一（昭和六）年には消滅している。

自由大学研究家の山野晴雄は、「上田自由大学の歴史は、大正デモクラシーの時代に、地域民衆がつくりあげた文化運動がどんなものであったかの一事例を示している。そうして、そこには、それまでの文化が中央の知識人によってつくりだされてきたのに対して、地域の民衆が新しく文化の推進者としてたちあらわれたことをみることができるのである」（土田杏村と上田自由教育「富田博之・中野光・関口安義編『大正自由教育の光芒』久山社、一九九三・五）とまとめている。恒藤恭が地域民衆の文化運動としての自由大学に、講師としてかわりをもったことは、彼ののちの生涯の歩みの大きな資産となった。それは一九三三（昭和八）年の京大事件での対処ぶりや、第二次世界大戦後の地域大学としての大阪市立大学の創設というヴィジョンにも影を宿しているのである。（以下次号）

